

人類学研究所 通信

第10号

Nanzan Anthropological Institute
 南山大学人類学研究所
 〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
 Tel. 052-832-3111 (Ext. 580)
 2002年3月20日発行
 e-mail: nuai@ic.nanzan-u.ac.jp

「挨拶にかえて」

吉田竹也

現在、人類学において関心の焦点のひとつになっているのが、学会誌でも特集が組まれた「文化の政治学」である。フォーコークやサイド、スピヴァクらに触発され、ポストモダンあるいはポストコロニアルの立場にたつ構築主義者たちが、特定文化を表象することの政治性・権力性をめぐって議論を戦わせている。これについてここで議論するわけではないが、関連する点としてふたつほどこの場を借りて触れておきたい。

ひとつは、議論の基底に流れる合意についてである。つまりそこには、論争を宙に浮いたものにしないうえにも、具体的な個々の表象実践のあり方やその脈絡を可能な限りこまやかに書き留めることがまず重要だという、人類学者としての共通認識があるように思われるのである。それは、あらためて（すなわち『文化を書く』の議論を踏まえた上で）民族誌的記述のレベルにたちかえて、人類学者がなすべき第1の作業を考えようとすることであり、そうだとすればそれはギアツの言う「厚い記述」に重なることになる。ポストモダン人類学はギアツの中途半端なところをのりこえてラディカルな方向に走ったわけだが、現状はある種の先祖帰りをしているような印象さえ受ける。その意味では、あらためて解釈人類学の可能性と限界を再検討すべき時期かもしれない。

もうひとつは、「文化の政治学」というこの表現についてである。おそらくこの場合、問題なのは「文化」をめぐる政治性（権力性）というよりもむしろ政治性＝経済性だろうと考えられる。この点はポリティカル・エコノミーという言葉があるように当然といえば当然なのだが、現状では（この種の議論がマルクス主義を抛り所にしていてもかかわらず）政治性だけが前面で論じられる傾向があることは否めないのではないかと考えている。私なりに現代人類学理論における文化の資源化／文化資源学という視点の有効性をまったりと考えていきたいと思っている。

(南山大学人文学部人類文化学科助教授)

目次

「挨拶にかえて」 吉田竹也	1	Christian Ethics and the Modern Domestic Sphere	
アメリカ合衆国におけるムスリム市民と		Leila Madge	11
アメリカ人のイスラーム観 大類久恵	2	所長日誌	18
		研究所の活動（講演会・研究会など）	24

アメリカ合衆国におけるムスリム市民とアメリカ人のイスラーム観

大類 久恵 (城西国際大学助教授)

I アメリカ合衆国におけるムスリム市民

1 イスラームの定義

イスラームとは、アラビア語で「平和」および「絶対的な帰依」を意味し、ムスリム（イスラーム教徒）の宗教の総称、またこの宗教思想を基盤とする文化全体を指す語である。イスラームの教えによれば、現世および来世における平和は、神への絶対的な帰依によって人間にもたらされるものとされる。

2 アメリカ合衆国におけるイスラームの三分類

J・ゴードン・メルトン編『アメリカ宗教事典』は、合衆国におけるイスラームを、イスラーム、スーフィズム、黒人イスラームに分類している。三分類のひとつとしての狭義のイスラームは、移民によって合衆国にもたらされたイスラームを意味し、合衆国においては多数派のスナ派と少数派のシーア派に、さらに分類される。

スーフィズムは、イスラーム教汎神論である。2000年刊行の同事典には、スーフィズムの流れを汲む37宗派が掲載されている。そのほとんどは1970年代初頭に創設された組織である。

黒人イスラームは、アフリカ系アメリカ人を信徒にもつイスラームを指し、主として合衆国生まれのイスラームを意味する。合衆国史において最大の影響力をもつ黒人

イスラームは、ネイション・オブ・イスラーム (Nation of Islam、以下 NOI と略称) である。同事典に掲載されている14の黒人イスラーム宗派のうち、7宗派が NOI から派生したものである。これとは別に、NOI の先駆的組織と位置づけられるムーイッシュ・サイエンス・テンプル (Moorish Science Temple) の流れを汲む2宗派がある。

黒人イスラームのなかでは、厳密には合衆国生まれでない点において例外的な存在がアフマディア運動 (Ahmadiyya Movement) で、同事典によれば2宗派が現存する。アフマディア運動は、19世紀末にインドで起こったムスリム改革運動で、アフマッド (Hazrat Mirza Ghulam Ahmad, 1835-1908) をメシアとしたことが、名前の由来である。この運動は伝道活動を重視し、合衆国初の拠点となったセンターは、1921年シカゴに設立された。初期の回心者のほとんどがアフリカ系アメリカ人であったことから、合衆国におけるアフマディア運動は、黒人イスラームとして発展してきた。1965年の移民法改正以降、南アジアからの移民が加わり、現在は首都ワシントンに本部を置いている。

アメリカ合衆国におけるムスリムの人口は、連邦政府が行なう国勢調査の数字としては現れないこともあって、公表する機関によってばらつきがある。2001年現在で、約6百万人が妥当な推定値である。ただし、たとえばアメリカ・ムスリム協議会

(American Muslim Council) が、ムスリムの推定人口を約 7 百万人と公表しているように、ムスリムの組織のなかには、やや多めの推定値を公表するものもある。いずれにせよ、2001 年現在におけるムスリム人口が合衆国の全人口に占める割合は、1%未満である。しかし、移民と回心者を合わせたムスリムの人口増加の速度はきわめて速く、合衆国におけるユダヤ人口を凌ぐ日も近いとされる。

メルトン編の事典の分類に従って概算を出せば、合衆国における全ムスリム人口の約 3 分の 2 はイスラームに、残りの 3 分の 1 のほとんどは黒人イスラームに属する。スーフィ（スーフィズム教徒）の推定人口は数千であり、全ムスリム人口に占める割合は 1%に満たない。ただし、後述するように、今日では、黒人ムスリムの多数派がスンナ派ムスリムとなっているため、これらの数字は、ひとつの目安と考えるべきであろう。

3 イスラームの歴史と現状

狭義のイスラームの北米大陸における歴史は、アメリカ合衆国建国以前に遡る。たとえばステファン・ターンストロム編『ハーバード・アメリカ民族集団事典』は、ムスリムの新大陸到達を 12 世紀に遡ると記した、中国の書物について言及している。15 世紀以降、スペイン、ポルトガル人に随行した北アフリカのムスリム水夫や、レコンキスタ完了後カトリックによる迫害を逃れるために、ムスリムであることを秘匿したモリスコたちも、北米大陸に到来していたとされる。16 世紀には、オスマン帝国のムスリムも新大陸探検を試みた。北米大陸

における、北アフリカやイベリア半島以外からのムスリムの存在は、17 世紀にロードアイランド植民地を建設したロジャー・ウィリアムズが、植民地の宗教的寛容を「トルコ人さえ」歓迎すると表現したことにもうかがえる。

17 世紀から 19 世紀にかけて、現在のアメリカ合衆国にアフリカから連行された奴隷の約 25%は、ムスリムであったとされる。しかし、白人による僅かな記述と口伝以外の資料は、ほとんど残されていないため、新大陸における文化形成への、ムスリム奴隷の貢献を具体的に知ることは難しい。奴隷制度という特殊な状況下で、キリスト教への改宗を強制された者や、イスラーム信仰を隠さなければならなかった者も多く、ムスリム奴隷がもたらしたイスラームが、アメリカ社会に与えた影響は、最小限にとどまったと考えられる。

ムスリム移民の合衆国へのまとまった移住は、1875 年頃始まった。アラブ系キリスト教徒に続いて故郷を後にしたアラブ系ムスリムや、東欧系ムスリムが合衆国に移住し、デトロイト、ミシガンシティ、シカゴ、ニューヨークなどの都市およびその近郊に定住した。祖国で教育や職業訓練を受ける機会に恵まれなかった、単身の男性移民が圧倒的に多く、合衆国で成功を収めて帰郷することを目的としていた。移民の多くは、季節労働者、鉱山労働者、工場労働者、行商人になり、出身地域別のムスリム共同体を形成して生活した。各共同体の中心的な施設として、モスクが建設された。

ムスリム移民の波は、第一次世界大戦の勃発で中断し、その後 1920 年代から第二次世界大戦前まで、第二波の移民が到来した。

この時代の移民も、第一波の移民と同様、主として都市部に定住した。当時勃興しつつあった自動車産業に従事した者も多かった。第二次世界大戦の勃発で再び途絶えた移民の波は、戦後著しく増大し、中東以外の地域からも多数の穆斯林移民が移住した。1940年代から1950年代には、当時のソ連邦、東欧からの政治難民が到来した。戦後増加した中東、北アフリカ、南アジア出身の穆斯林留学生が帰化することも多かった。中東地域からも、1949年のイスラエル建国によって故郷を離れたパレスチナ人や、1958年のイラクの革命後に出国したイラク人など、故郷の政変の影響で、多くの穆斯林が合衆国に移住した。

第二次世界大戦後の穆斯林移民の増加は、全米ないし全北米規模での穆斯林組織の設立を促した。1949年には、シーア派穆斯林の最大組織である全米イスラームセンター (Islamic Center of America) が、デトロイトで設立された。スンナ派の組織としては、1952年に合衆国・カナダ・イスラーム組織連盟 (Federation of Islamic Organizations in the U.S. and Canada) が、アイオワ州セダー・ラピッズを本拠地として設立された。また同年、Muslimの学生援助組織が結成され、これは後に北米イスラーム協会 (Islamic Society of North America) に発展した。全米組織や全北米組織は、各共同体の中心として独自に運営されてきたイスラームセンターやモスクを統括する役割を果たすとともに、機関誌の発行、年次大会の開催、専門的な機能をもつ組織の設立などを通して、イスラームに関する知識の一般への普及に貢献した。

Muslimの組織数は、以後増加の一途を

たどった。政治活動を通じてMuslim市民の地位向上を目指す組織、教育や説教に重きをおく組織、特定の国あるいは国際的なイスラーム共同体とのつながりが深い組織など、多種多様な組織が設立された。移民の出身地域別の組織や民族別の組織も多く、組織の背景が政治的見解に反映することもある。前述のシーア派組織、全米イスラームセンターが、イラン・イスラーム革命を支持して、組織の結束を強めたことは、その例である。

1965年の移民法改正は、Muslim移民の変質をもたらした。移民法改正後には、政治的難民を例外として、一般に高学歴、専門職従事者が、定住を志向して合衆国へ移住した。主としてパキスタン、イエーメン、レバノン、革命後のイランなどからのこうした移民は、合衆国移住後カリフォルニアやニューヨーク州の郊外に居住する中産階級として、アメリカ社会に速やかに同化した。近年では、国際情勢を反映して、湾岸戦争後のクウェート人、クルド人、パレスチナ人移民、内戦や飢餓を逃れたソマリア人、アフガン人移民、ボズニア・ヘルツェゴビナなどの旧ユーゴスラヴィアからの移民が、数多く移住している。

4 ニューエイジ運動とスーフイズム

スーフイズムの起源については諸説があるが、およそ8,9世紀頃起こり、11世紀頃体系化されたとする見方が有力である。社会的不公正や罪に対して自責の念を抱いた人々が、世俗の欲望を捨てた清貧生活を送りつつ、自己の内面浄化をはかるために、自我を滅却し、唯一の真理としての神への同化を希求したことが、起源であるとされ

る。このようにスーフィズムの思想は、イスラームの教えでは唯一絶対至上の存在とされる神を、人間と同一視することにつながるために、歴史を通じて、イスラーム支配者層などからの迫害の対象になってきた。

スーフィズムが合衆国において、1960年代末から1970年代にかけて受容された事実は、ニューエイジ運動との連関でとらえることができる。「ニューエイジ」とは、既存の社会を根底から変革することによってもたらされる、より良い時代としての「新時代」を意味する。ニューエイジ運動では、個々人が、自己の本質すなわち「内なる神」を求めて変容を遂げることで、新時代が導かれるとされる。変容を遂げて新しい生き方を受け入れた人々が、自然や他者との調和を模索しながら新しい文化を創造することによって、社会全体が進化するとされるからである。新時代という概念はまた、春分の日太陽の位置が、現在魚座から水瓶座に移行しつつあるという、西洋占星術における人類史観とも重ね合わせて語られる。そのため新時代は、しばしば「水瓶座の時代」にたとえられる。

ニューエイジ運動が前提とする自己の神性という概念は、創造主である神と創造物である人間を明確に区分する、ユダヤ・キリスト教の伝統との決定的な相違を孕む。その意味で、ニューエイジ運動は、既成外の文化原理を求めた対抗文化運動を継する、あるいはその一部を形成する、精神世界の探求とみなすことができる。

自己の神性を前提とするニューエイジ運動は、きわめて個人主義的な運動でもある。ニューエイジ運動には、教団や教祖、聖典や教義、またそれらによる束縛は存在しな

い。運動の担い手であるニューエイジャーたちは、瞑想やヨガを自己変容の手段として利用するが、それらは仏教やヒンズー教の教義とは切り離された、技術としてのみ用いられる。しばしば語られる輪廻転生の思想や、実践される癒しの追求も、いかなる既成宗教とも結びつけられない。換言すれば、ニューエイジ運動は、ヨガや瞑想、輪廻転生の思想、癒しの追求など、既存のアメリカ文化にとって異質な要素を、ライフスタイルとして、中産階級の生活に組み込むことに貢献した。それゆえ対抗文化運動としてのニューエイジ運動は、ライフスタイルの変革をも含んだ、精神世界の探求としても定義づけることができる。

イスラーム教汎神論であるスーフィズムは、ニューエイジ運動の興隆のなかで、アメリカ社会に受容された。スーフィズムの本質である汎神論が、ニューエイジ運動の思想と通底した事実が、スーフィズム受容の要因であったことは間違いない。しかし同時に、イスラーム的な祈祷や集会、祖師が施す精神的な癒しの過程など、アメリカ社会における既成外の文化原理を象徴するライフスタイルが、多くの回心者にとって魅力的に映ったことも確かであろう。アメリカ社会におけるスーフィの多くが、イスラームの正統的な教義に無関心であるばかりか、スーフィズムがイスラームから派生したことを知らない場合すらある実情は、これを証明している。

スーフィズムは、特にスンナ派ムスリムから異端視されてきた歴史をもつが、合衆国において両者は、ともに社会の少数派として平和的に共存している。スーフィは、ニューヨーク州北部、カリフォルニア、テ

キサス、ニューメキシコ、ミシガン州を中心に共同体を形成し、活動を続けている。一般に政治的、イデオロギー的な関心が低いスーフィの、主たる社会的活動は、スーフィズムやイスラーム一般に関する文献の出版である。

5 黒人イスラームの歴史と現状

ネイション・オブ・イスラーム (NOI) は、合衆国生まれのイスラームとして、歴史を通じて最大の影響力をもってきた。NOIの起源は、1930年7月4日、W・D・ファードと名乗るシリアからの行商人が、デトロイトのアフリカ系アメリカ人街に出現したことに遡る。ファードは、アフリカ系アメリカ人の祖国からの商品紹介とともに、祖国アフリカの様子を伝える小規模な集会をもつようになった。初めは個人宅で開かれていた集会が、徐々に参加者を増し、会場にホールを借りるほどの大集会になった。このホールが「イスラーム寺院 (The Temple of Islam)」と呼ばれ、NOIの前身となった。

集会を重ねるなかで、ファードは、アフリカ系アメリカ人の出自に関する物語を繰り返し語った。ファードによれば、アフリカ系アメリカ人は、「ニグロ」ではなくシェバズ族の子孫であり、地上でもっとも高貴な「原人間 (the original people)」であったという。しかし白人の奴隷商人によって、多くの者が北アメリカに連行され、アラビア語やイスラームなどの文化を剥奪された。このようなシェバズの子孫を祖国へ連れ戻すために、アラーの神がファードを合衆国へ派遣したという。ファードは自ら予言者を名乗り、集会は宗教運動の色合いを帯び

たカルトに発展した。

1934年、ファードは謎の失踪を遂げた。ファードの失踪後、一時は分裂したカルトを、組織化した人物がイライジャ・ムハメッドである。ムハメッドは、イライジャ・プールとしてジョージア州に生まれ、1923年に妻子を伴ってデトロイトへ移住したが、大恐慌後、自動車工場労働者の職を失い、生活保護での生活を余儀なくされた。彼は、1931年に初めてファードの集會に参加した。後に彼自身が語ったところによれば、このとき彼は、ファードが神であることをファード本人に告げたという。熱心な信徒となった彼は、1932年にファードからムハメッドという名前を授かり、後にシカゴの第二寺院を任された。

ファードの失踪によってカルトが求心力を失った後も、ムハメッドは、シカゴを拠点とする分派の統率者として活動を続けた。ムハメッドの分派は、1940年までに「北米の荒野において失われ発見されたイスラームの民 (The Lost-Found Nation of Islam in the Wilderness of North America)」という NOI の正式名を名乗るようになっていた。この頃までにムハメッドは、ファードを神格化し、自身を予言者と規定して、カルトを継承し組織化していた。以後 NOI の活動の中心は、シカゴに移された。1942年から1946年まで、ムハメッドが徴兵拒否により投獄されたために、組織の活動は一時期停滞を余儀なくされた。しかし、信者はこれを予言者の受難と解釈し、予言者ムハメッドの正統性はこの時期に確立した。

ムハメッドは第二次世界大戦後に釈放され、組織は1950年代に大規模な拡張の時期を迎えた。ムハメッドは、ファードが創始

した宗教運動に、ふたつの要素を付加した。第一に、組織の経済的拡大である。戦後の好景気に乗じて、ムハメッドは、信徒が経営する食堂、小売店、農場などを各地に建設し、「黒人から買え」をスローガンに、アフリカ系アメリカ人資本の白人社会への流出防止を信徒に指示した。この頃までにムハメッドは、NOIの目的が、合衆国南部数州の統合独立による「イスラーム国家」の建設であると公言していた。それゆえ組織の経済的発展は、合衆国内における独立国家建設の手段と意義づけられたが、マスコミからは「黒人資本主義」として非難された。

第二に、ムハメッドは、ファードが語ったアフリカ系アメリカ人の起源を、「ヤカブの歴史 (Yakub's History)」という起源神話の形で体系化した。以後、この神話は、NOI信徒であるアフリカ系アメリカ人にとって、自己尊厳の源泉としての機能を果たすことになった。神話はまた、創始者ファードを明確に神格化し、予言者としてのムハメッドの地位を不動のものにした。

1950年代におけるNOIの発展は、マルコムXという有能な代弁者の存在に負うところが大きい。マルコム・リトルとして1925年にネブラスカ州で生まれた彼は、1948年に獄中で回心し、NOIの信徒となった。1952年の釈放後、マルコムXは、デトロイトのNOI寺院の集會に熱心に参加し、ムハメッドの信頼を得て、ほどなくニューヨーク寺院の牧師 (minister) に任命された。以後1960年代初めまで、マルコムXは、機関誌を通して信徒動員に努めるとともに、ムハメッドの代弁者として全米で数多くの演説を行なった。

1963年12月、マルコムXは、「白いアメリカに対する神の裁き」と題する演説でケネディ大統領の暗殺に言及し、これが物議を醸し出したために、ムハメッドから90日間の謹慎処分を命じられた。1964年3月、謹慎処分を解かれたマルコムXは、NOIからの離脱を表明し、独自の宗教組織「ムスリム・モスク (Muslim Mosque Inc.)」を創設した。彼は、4月から5月にかけてのメッカ巡礼とアフリカ諸国歴訪を経て、スンナ派のイスラーム教徒に回心した。また、帰国後6月には、政治組織「アフリカ系アメリカ人統一機構 (Organization of Afro-American Unity、以下OAAUと略称)」を発足させ、7月にカイロで開催されたアフリカサミット會議に、OAAU代表として参加した。以後マルコムXは、合衆国におけるアフリカ系アメリカ人に対する人権侵害の実情を、広く国際社会に知らしめるべく、精力的に活動を続け、1965年2月21日、志半ばで暗殺者の凶弾に倒れた。

マルコムX離脱後のNOIは、1975年に統率者ムハメッドが病没すると、彼の息子ウォレス・D (後にウォリス・ディーンと改名)・モハメッドによって継承された。最晩年のマルコムXの立場に共鳴していたモハメッドは、自らスンナ派導師の資格を取得した。また彼は、父ムハメッドの統率下でNOIが説いた人種的憎悪と、ムハメッドの予言者としての地位を否定した。組織は、二度の改名を経て、1980年「アメリカン・ムスリム・ミッション (The American Muslim Mission)」となったが、1985年モハメッドによって解散された。組織の傘下にあったモスクは、各導師の統率下で、スンナ派のモスクとして、以後個別に存続し

ている。モハメッド自身は、メッカを拠点とする組織に属する導師として、上下両院の開会時にイスラーム教の祈禱を史上初めて執り行うなど、全米規模で活躍を続けている。

一方、故ムハメッドの教えに固執した信徒たちは、モハメッドと袂を分かち、NOIの正統な継承者を名乗る四つの組織を個別に結成した。そのうち最大の組織は、ルイス・ファラカンが1978年に設立したNOIである。ファラカンは、1995年の百万人の行進などで統率力を発揮したが、反アラブ的な発言が禍して、移民とその子孫のイスラーム組織とは良好な関係を保っていない。近年ファラカンは、病氣療養を理由に公の場にはあまり登場していない。

II アメリカ人のイスラーム観

1 アメリカ人のイスラーム観：テロリズム、後進性、非民主性

以上で概観したように、アメリカ合衆国には少なからぬ数のムスリム市民が生活している。しかし、ムスリム以外の大多数のアメリカ人にとって、イスラームは馴染みの薄い「他者」の宗教、文化である。異教、異文化としてのイスラームは、その異質性が強調されるだけでなく、しばしば否定的なイメージを伴って認識される。

合衆国においてイスラームが纏う否定的なイメージの例として、まずテロリズムを挙げることができる。特にイスラーム原理主義(fundamentalism)は、テロリズムと同一視されがちである。原理主義とは、イスラームに限らず、多くの宗教運動が内包

する、宗教的な純粋性への回帰を求める潮流である。イスラーム原理主義とは、イスラームの原理と純粋性への回帰を呼びかける、イスラーム主義運動の総称である。確かに、原理主義者のなかには、世界各地でテロリズムを引き起こす、少数の過激派が存在する。しかし大多数のイスラーム原理主義者は、宗教政治活動を通して、それぞれの居住地に適したイスラーム主義を目指し人々であり、テロリズムとは無関係に生活している。

1993年の世界貿易センタービル爆破事件は、イスラームがテロリズムと同一視される契機となった。事件の首謀者がムスリム移民であった事実が、中東で「ムタタリフーン」(過激派)と呼ばれるムスリム・テロリストの合衆国内での活動を裏付け、テロリズムの脅威をアメリカ人にとって身近なものにしたからである。以後、たとえばムスリム・テロリストの典型を描くハリウッド映画などを通じて、テロリズムと深く結びついたイスラーム像が、アメリカ社会一般に浸透していった。在米テロリストの脅威は、2001年9月の同時多発テロ事件で再度現実のものとなり、ムスリム以外のアメリカ人にとって、テロリズムとイスラームの結びつきはさらに強まった。

後進性もまた、ムスリム以外のアメリカ人がイスラームに纏わせる、否定的なイメージである。合衆国を含めた西欧世界に比べて、イスラーム世界が文化的に遅れていることを示す例として、メディアはしばしば、イスラーム世界における女性の地位をとりあげる。イスラーム世界における女性の地位に関しては、客観的に見ても改善の余地があるとは言えそうだが、当事者であ

るムスリム女性からの証言が極端に少ない事実には留意すべきである。

イスラームが纏う否定的なイメージとして、第三に非民主性が挙げられる。この点に関しては、山内昌之著『イスラムとアメリカ』に詳しい。山内は、サルマン・ラシュディーの『悪魔の詩』をめぐるホメイニーの宗教的死刑宣言を例にとり、欧米流の民主主義とは異なり、神のもとの平等を謳うイスラーム流の民主主義について分析している。すなわち、イスラーム世界には、欧米的な民主主義とは異なる民主主義が存在するという指摘である。また山内は、世界中のムスリムの思考と行動が均質的であるという、アメリカ人が一般に抱きがちな誤解についても、注意を喚起している。

2 「文明の衝突？」におけるサミュエル・ハンチントンのイスラーム観

1993年『フォーリン・アフェアーズ』誌に掲載された、サミュエル・ハンチントンの論文「文明の衝突？」は、冷戦後の世界における対立を、異なった文明間に起こると想定した点が、発表当時の話題を呼んだ。ハンチントンが、文明間の対立のなかでも、西洋文明と儒教・イスラーム文明の対立を特に重視したために、2001年9月の同時多発テロ事件以降、この論文は、再び脚光を浴びることになった。アメリカ（西洋）対イスラーム世界の対立を予言したとして、ハンチントンの炯眼を賞する傾向は、日本のメディアにもみられた。しかし、ハンチントンの主張の一部だけを見て、今回のテロ事件を論じることは、イスラームの異質性をいたずらに強調し、事件に対する客観的な判断力を失うことにつながりかねない。

ハンチントンは、現在軍事力を削減している西洋世界と、反対に軍事力拡大をはかりつつある儒教・イスラーム世界との対立を際立たせている。論文を精読すれば、彼の主張する、儒教・イスラーム派（Confucian-Islamic connection）が、武器や軍事技術の流通に象徴される、軍事面での連係であることが読み取れる。しかもこの連係は、実在の軍事同盟というより、合衆国の国防という観点からみた「仮想連係」としての意味合いが強い。すなわち、ハンチントンのいう儒教・イスラーム派…儒教文明に馴染みのある日本人にとっては、多分に奇妙な響きをもつ語であるが…とは、西洋、主として合衆国にとっての「軍事的脅威」と置き換えることができる。「文明」という語を用いながらも、ハンチントンは、文化や宗教の相違を問題の核心にはしていない。彼の問題意識にあるものは、現代世界における軍事的地勢図への注意の喚起に他ならない。かつて国家安全保障会議に勤め、現在はハーバード大学戦略研究所に籍を置くハンチントンにとって、当然といえば当然の帰結であろうし、論文執筆の意図もそこにあったといえる。以上のことに鑑みれば、ハンチントンが用いた「文明」という語に惑わされて、2001年のテロ事件をむやみに「文明の衝突」に帰する態度は、戒められるべきであることがわかる。

3 メディア報道とイスラーム

合衆国のメディアによるイスラーム報道に関しては、イボンヌ・ハダッド他編『アメリカ化をたどるムスリム？』所載の、グレッグ・ノークス論文「ムスリムとアメリカの定期刊行物」に詳しい。

ノークスは、イスラーム報道に関して、合衆国のメディアが抱える問題点として、第一に、メディア界におけるイスラーム専門家の数が少ないことを挙げている。その結果、中東などのイスラーム圏への特派員数は、他の地域と比べて少なく、イスラーム圏に関する情報源に限られることになる。また、専門家が少ないことは、情報操作をより容易にすることにもつながる。

第二に、専門家数と情報源の少なさとも関連して、報道内容の偏向が挙げられる。合衆国のメディアは、視聴者や購読者の受けをねらった、ムスリムの異質性を強調する報道を、多く発信する傾向がある。ノークス論文では、たとえば集団礼拝やコーランを掲げたデモ行進など、ムスリムを集団として描き、均質性を強調する報道が挙げられている。また、個人として描かれるムスリムはたいていが過激派で、ムスリム民衆の人間的な側面はほとんど報道されないことも指摘される。しかし、発信側の視点に立てば、一般民衆の日常生活がニュースになりにくいことは想像に難くない。資本主義社会におけるメディアが、市場原理の影響を強く受ける現状に鑑みれば、メディア報道の問題は、発信する側の問題であるだけでなく、受け手である視聴者、購読者の問題でもあることは言うまでもない。

イスラーム報道に関して、合衆国のメディアが抱える以上のような問題を解決するためには、より多くのムスリム市民によるメディアへの参入が求められる。しかし、現実には、ジャーナリストを志望するムスリム市民はまだそれほど多くないようだ。

主要参考文献

- Essien-Udom, E.U.
1962 *Black Nationalism*. Chicago: Chicago University Press.
- Haddad, Yvonne Yazbeck, and John L. Esposito, eds.
1998 *Muslims on the Americanization Path?* NY: Oxford University Press.
- Haddad, Yvonne Yazbeck, ed.
1991 *The Muslims of America*. NY: Oxford University Press.
- Lincoln, C. Eric
1961 *The Black Muslims in America*. Boston: Beacon Press.
- Melton, J. Gordon, ed.
1999 *The Encyclopedia of American Religions*, 6th. ed. Detroit: Gale Research.
- Thernstrom, Stephen, ed.
1980 *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Turner, Richard Brent.
1997 *Islam in the African-American Experience*. Indianapolis: Indiana University Press.
- 山内昌之
1995 『イスラムとアメリカ』 東京: 岩波書店

[付記] 本稿は、南山大学人類学研究所が主催する公開講演に於いて、2001年11月10日に行なった講演をもとにしている。筆者に講演の機会を与えてくださった方々と、熱心に耳を傾け質疑応答に参加して下さった当日の参加者の方々に謝意を表したい。

Christian Ethics and the Modern Domestic Sphere

Leila Madge

University of California, San Diego

It is the monthly city wide meeting of the Women's Friendship Society (*fujin no tomo no kai*) in Nagoya, and over 200 participants have gathered. As the final sounds of the hymn and amen drift away, the women bow, take their seats and open their "readers."

Adam and Eve committed the first sin of mankind against God in the Garden of Eden. By failing to follow God's rule and succumbing to their desires in the taking of the apple, they are driven from the Garden and find themselves in need of clothes and a home. Food, clothes, and the home were at the origins of sin but they were also the beginning and the basics of culture. Through God's mercy we can rebuild our lost Eden through our own hands by beginning with the home and the lifestyle. And so proceeds the reading.

A scene similar to this one involving the singing of hymns and the reading of religious works, is repeated in weekly and monthly meetings of over 190 Women's Friendship Societies throughout Japan.

In this brief essay, I am going to focus on how Christian ethics appear in the various readings and practices of the Women's Friendship Society, and in turn how they are received by its members. In doing so, I will discuss the interaction between a religious ideology that informs the Society's practices and certain domestic practices that are intended to fulfill the Society's religious mission. As we shall see, the coexistence of two sides of the Society—religious thought and practice, or ideology and technique—that originally coexisted have gradually become separated from each other with the result that the Christian thought behind the practices has become hidden.

My information comes from over one and half years of participant observation in various types of meetings of the organization, archival work on the organization's history, in-depth interviews, and a questionnaire distributed to Nagoya members.

A History of the Founder and Her Ideas

The Women's Friendship Society traces its activities and beliefs to the Christian-Socialist Hani Motoko. Born in 1873, she was the eldest daughter of a recently deposed samurai family of modest rank and some wealth. Hani was one of a few thinkers writing about women and the home at the turn of the twentieth century—a time that was marked by a general preoccupation with the status of women and the form of the family in the nation state's modernization project. Hani was particularly concerned with the remnants of the feudal class structure and the growing deleterious effects of capitalism in creating social inequality. In her view, the social inequalities attending the old class system and the economic inequalities being created within the new capitalistic system were anathema for both the individual's happiness and society's well-being. Hani targeted women in the home for the task of remaking Japan into a spiritually and materially abundant place, into an Eden.

In creating her new vision of Japan and in targeting women for the task of its realization, Hani was influenced by various Christian (particularly Protestant) notions that she learned from her experience in Meiji Women's Higher School—an institution founded by foreign educated Japanese missionaries. Notions of mission and dedication to labor were used to sustain her vision of men and women contributing equally, although in different ways, to the home and society. Using biblical passages, Hani described how the new Japan would be based on concepts of love, cooperation and self-reliance. As such, the new Japan was to be God's, Christ's, country. References to faith in God's power in addition to the use of agricultural metaphors of cultivation suggested that one's labor of love, cooperation, and self-reliance would eventually be rewarded and bear fruit for the individual and society. In her writings, Hani provided didactic examples, often from her own life, of how these various Christian concepts could be applied to daily life (both in and outside of the home).

In addition to providing spiritual guidance, Hani also wrote practical manuals for her followers. These practical manuals clearly spelled out how the new Japanese woman, home, and society should be rational and efficient. The rational use of labor, capital, and space would allow the individual to make the most of time and money while also having the eventual desirable effect of eradicating social and economic differences and raising the general culture of society.

Her Housekeeping and Family Budget Book (*kaji kakeibo*), published in 1927, is undoubtedly the best-known example of her more practical writings. Here she lays out in detailed charts plans for the management of the household's money and the housewife's time. The purpose of the household budget was threefold: to encourage saving so one could be

self-reliant; to instill a sense of abundance while living frugally; and to advocate charity with excess income. As was the case for Weber's Protestants, saving and living simply were moral endeavors for Hani.

Hani's practical guidance for efficiency extended to the planning of time. By leading a regulated life, the housewife could save time on household chores and thus contribute to society, particularly through volunteer activities. In order to liberate women from housework so they could contribute to society, she also gave advice on how to get the man and the children of the house to contribute to the upkeep of the home. Her concern with efficiency and practicality extended to reconsidering Japanese architecture, clothing, and even the Japanese language and gift-giving customs.

To Whom Did Hani's Message Appeal?

Hani originally promoted her message of spiritual and social reform through *The Women's Friend*, a periodical she created with her husband in 1906. Many of Hani's earliest followers, as well as the readers of her periodical, were amongst the new educated middle class, the salaried employees who worked in various government institutions and the growing industrial sector. These early followers were similar to many of the earlier followers of Christianity at the turn of the twentieth century in that they were attracted to Protestantism's modern bourgeois ethic with its emphasis on equality. This Protestant ethic as applied to the home envisioned a social role for women far greater than had been recognized within the old samurai ideology, which limited women's redeeming qualities to their servility and fecundity. But like the old samurai ethic, Christianity could offer similar guiding principles that emphasized ideas of industriousness, sincerity, and honesty.

In addition to her ethical claims, Hani's new followers often found appeal in her practical home guidance, much of which involved new Western ideas, practices, and consumer goods. Hani's faith regarding the power of rationalization seemed to promise the attainment of Western standards of living. In short, the appeal of Hani's message lay in the power it gave the individual woman to effect important changes in her own life. Regardless of her wealth, intelligence, or "inherited constitution," the follower could attain what she strove for by being industrious, using Hani's rationalization techniques, and having "faith."

Her two-pronged message of ethic and technique proved very popular, and it increasingly crossed class- and regional lines to reach a wide range of readers in urban and rural areas. In 1923, the "admiring readers" (*aidokusha*) of *The Women's Friend* established their first small study groups where members would gather to read the writings of Hani and hold small classes on household management. In 1930, the first national meeting of the Women's Friendship Society was held in Tokyo with representatives from 39 regional groups.

In time the Women's Friendship Society came to be seen as a place where women could learn of their new social role along with the new skills to fulfill that role. There were classes on child rearing, cooking, sewing, laundering, and, of course, time and money management. The Women's Friendship Society also carried out nation-wide campaigns and traveling exhibitions promoting the rationalization of lifestyle. A traveling campaign in 1932 attracted over half a million people and was attended by the Emperor and Empress, two figures who were similarly linked with the creation of a new Japan.

Although Hani died in 1957 at the ripe age of 84, her influence lives on through the Society. At the time of its 70th anniversary in 2000, the Women's Friendship Society had a membership of over 25,000 with approximately 190 branches.

De-Christianizing Hani's Message

Hani's earliest followers, the old samurai women and the new middle-upper class women of the pre-war generation, identified Hani's message regarding women's mission as Christian, and thus in time came to identify themselves as Christian. Most members today, however, do not think of themselves as Christian. Currently only 29 % of the members identify themselves as Christian (56% percent identify themselves as having no religion, and 14% identify themselves as Buddhist). The organization itself also downplays its Christian basis in seminars to attract followers by deleting the singing of hymns and the reading of Hani's religious writings. In short, the organization today often tends to present itself as a place where women can simply learn household and child-rearing skills that will make the running of the home better.

How or why has this de-Christianizing occurred? I would like to suggest three factors. First, Hani's message regarding women's social role and the home as public became part of a more common ideology regarding women and the family from the 1920s. As Sheldon Garon shows in *Molding of the Japanese Mind*, the government saw the positive social effects of Hani's and other Christian-Socialists' campaigns and began to promote similar messages and projects for women from the 1920s. This tendency to see women as having important roles in social management continues today. In short, Hani's gender ideology lost its peculiar Christian tinge over time.

Second, although Hani often referred to practices in Europe and the United States when discussing the social ethics and techniques for rationalizing everyday life, a comparison with other contemporary social movements suggests that her viewpoint was neither unique nor necessarily due to foreign influence. If we look at Bellah's seminal work on Tokugawa religion, we can see that Hani's message regarding women's role is not dissimilar to the Shingaku movement's message to merchants or the Hotoku movement's message to

peasants. That is, they all attempted to raise the moral level of the participant's role in society and all emphasized diligence, frugality, and self-reliance. Moreover, as Yasumaru Yoshio argues in *Nihon no kindaika to minshō shisō* the constellation of these values, what he calls a heart philosophy, has become the basis of conventional Japanese morality. (I might note that "cultivation of the heart" is a common term that Hani uses in her writing.) In short, Hani's spiritual message when interpreted by followers is not simply or exclusively Christian or even religious (if one wishes to differentiate between religion and social ethic).

Third, in time the religious or ideological and practical or technical aspects of Hani's message became separated. The former is often ignored or misunderstood in favor of the latter—the practical. Hani noted the confusion in a 1933 speech titled "Tomonokai hananizo" ("What is the Women's Friendship Society?"), when she remarked that the Society had been accused at various times of espousing communism, nationalism, and liberalism. At this point, she reasserted that her mission was a Christian one. Even Hani, however, succumbed to the separation of practice and ideology. During the war years in particular, Hani downplayed some aspects of her Christianity when Christianity was often understood to be anti-patriotic at the least, heretical at the worst. Her domestic management techniques, however, were eventually applied to the war effort. In various campaigns she called for women to donate one sen a day and five hours of labor a day to the war effort.

Perhaps more interesting than the separation itself is that the leadership of the Society, which tends to be overwhelmingly Christian, is quick to point out that although its mission is a Christian one, the Society is not a religious organization. The Society is probably trying to distance itself because of the general negative image religious organizations have today in Japan. An often offered biblical reference to Luke 16, used to justify their strategy for organizational survival, certainly seems to suggest the accuracy of this interpretation. (Luke 16, 1-13, is the story of the unjust steward who is commended by the Lord because he has been wise rather than ethical.)

Although currently lessons on domestic management techniques tend to override the religious, or more specifically Christian, message, the Women's Friendship Society is far from being devoid of spirituality. 83% of the Buddhist membership and 74% of those having no religion responded that the Society's "Christianity" had influenced their ways of thinking and living. In addition, in interviews, members continually stress that what keeps them involved over many years is not the household skills taught. After all, as they often state with laughter, "we are all experts in home budgeting and laundering by now." Rather, it is the reading of Hani's spiritual writings and the giving of personal interpretations (*kansō*) within the meetings that participants stress as the reasons for their ongoing participation.

How Members are Influenced by the Christianity in Hani's Thought

There are three ways in which interviewees believe they are influenced. First, Hani's spiritual writings give significance to the carrying out of everyday household tasks. It might be noted that although young women are home-centered for a reason different than Hani's earlier followers—that is, currently it is a capitalistic system rather than feudal ideology that keep them home—many find that Hani's writings and the giving of impressions in meetings help them see the value of their household tasks. Many members note that although Buddhist rituals such as visiting temples, cemeteries, or praying at a butsudān may be important rituals in Japanese life, they did not provide, in their particular homes, enough of a basis for the living of daily life. Without Hani's thought, they would have no faith (*shinkō*) only “habit” (*shūkan*). Members who were Christian also mentioned that Hani's writings gave concrete guidance on how faith can be applied to everyday life. They often positively contrasted the practice of faith in Women's Friendship Society with their experience of Church, which they saw as involving largely passive activities of singing and praying.

Second, Christian ideas commonly affect members in the way they attempt to or hope to educate their children. In particular, the notion that “man is made by God” was cited by many members to mean that their child's *kosei*, individuality, was to be valued and that social standards of what represented success and failure were not definitive. Young mothers also frequently mentioned that they often told their children that God was watching them when they were both good and bad.

And finally, many members are drawn to Hani's use of such (“Christian”) concepts as love, empathy, forgiveness, and modesty. For many members, they felt that these notions were lost in current Japanese society with its highly administered and rationalized forms of social management. In fact, many of these concepts are used to criticize the separation and overvaluation of efficient home management practices as they are practiced in the Society.

Concluding Remarks

Many of the Christian aspects of Women's Friendship Society are, as noted by members, not necessarily exclusively Christian. The alternative for members is often not that of Christianity versus some other religion, such as Buddhism, but rather Christianity versus nothing. And nothing seems most often to be understood as either sheer egoism or “coreless” existence, which makes one susceptible to outside opinion. Although some members have found spiritual significance in a new religion, such as Seichō no ie, in Church Christianity, or a more active form of Buddhism than “funeral Buddhism,” they still credit Hani and the Women's Friendship Society with bringing that spirit “home” to everyday mundane

activities.

Notes

1. This paper was presented at the Fifth Annual Asian Studies Conference Japan on 23 June, 2001, at Sophia University, Tokyo, as part of a panel convened by the author under the title "Hidden Religiosity."
2. Here I am referring to a paper given by Robert Kisala "What to Make of Japanese Nonreligiosity?" on the same panel.
3. Personal impressions are given by member in turn after one of Hani's writings has been read out loud at the beginning of the meeting. During the *kansō* time members apply the concepts in the reading to their own recent life events. The character of those impressions often appears to be quite similar to Zen-based ethical practices in the moral training of workers (as explained by Dorinne Kondo in *Crafting Selves*) or the Zen-based form of Japanese psychiatry as found in Naikan therapy.

References

Bellah, Robert

1957 *Tokugawa Japan: The Cultural Roots of Modern Japan*. New York: The Free Press.

Garon, Sheldon

1997 *Molding Japanese Minds*. Princeton: Princeton University Press.

Hani Motoko

1927 *Fūfuron*. Tokyo: Fujin no tomosha.

1927 *Kaji kakeibo*. Tokyo: Fujin no tomosha.

1927 *Shisō shitsutsu seikatsu shitsutsu inoritsu*. Vol. 1. Tokyo: Fujin no tomosha.

1931 *Hansei o kataru*. Tokyo: Fujin no tomosha.

1963 *Jiyū, kyōryoku, ai*. Tokyo: Fujin no tomosha.

Kondo, Dorinne

1990 *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.

Saitō Michiko

1988 *Hani Motoko—shōgai to shisō*. Tokyo: Domesu Shuppan.

Yasumaru Yoshio

1974 *Nihon no kindaiika to minshū shisō*. Tokyo: Aoki Shoten.

◆人類学研究所 所長日誌（2001年1月—12月）◆

1/1(月)「静かでいいな」と目が覚めた時に思った。窓の障子を開けると外は一面銀の世界だった。強風によって雪が地平線に沿って吹き飛ばされていた。クネヒトは久しぶりで、長年調査を続けている東北の村、花山村で正月を迎えた。大晦日の夜、友人とその家族とともに集落の小さな神社へ元朝参りに行ったが、集落の人々が誰も来なくて、少々淋しい雰囲気だった。今年は、今朝の天候と同様に厳しい年になろうかとフと思った。

1/17(水) 通訳の任務が頼まれて、クネヒトは名古屋地方裁判所へ出掛けた。原告側と被告側のそれぞれの主張が激しくぶつかり合うだけで、少しも前進はなかった。途中で気が付いたが、我々が今まで通された部屋は法廷ではなく、普通の部屋だった。今日、この部屋に入る時に戸の上についている札に「和解室」と記されているのでわかった。原告側と被告側は大きなテーブルを挟んで直接に議論することが出来る部屋だ。

1/18(木) 午後2時より「虫の会」のメンバー四人でサントリー文化財団の本部を訪れ、「虫の会」研究状況について報告した。「一風変わった研究だね」という反応を呼んだ。報告がいい雰囲気なのかで行われたので、今年は継続申請したら、きっと合格するチャンスがあるかも知れないと幾らか楽観的な気持ちで話し合いながら帰ってきた。けれども、どこかで不安感が残った。

1/21(日) 嵯峨御流名古屋司所の庄司信洲師の招待によりクネヒトは、この生け花の流派の新年会で「日本を考える」と題してやや冒険的な気持ちになって、講演した。会場が和服姿の御婦人たちで賑わっていて、日本的な雰囲気に包まれていた

が、花と器は世界各国から集められたものだったので、この新年会に案外国際的なイメージをもたらした。

1/26(金) 日本学術振興会外国人特別研究員の Leila Madge は合衆国のある大学の募集に応募するために、面節するだけではなく、模擬講義もしなければならなかった。講義の内容と形式に関する評価を求めることも兼ねて、彼女は懇話会で *Cuteness and Beyond: Consumer Aesthetics in a Post Postwar Japanese Order* という話題を提供した。

「かわいさ」を過剰重視している現在日本社会がこの結果、子供のような未熟さを理想化することによって、大人としての責任を避けようとしているのではないかという彼女の指摘はかなりの議論を呼んだが、重要な指摘だと評価された。

2/16(金) —17(土) 東京外国語大学AA研の豊島正之と三尾裕子両氏は、小川尚義の資料を調査するために研究所を訪れた。

2/20(火) 中部大学国際関係学部助教授の黄強氏とともにクネヒトは北京へ出張した。来る夏に予定している調査を準備する目的で、北京の社会科学学院の孟慧英先生と中央民族大学の Sampilnorb 先生に会って、夏の計画とクネヒトのための通訳者などの件を協議した。良い助言を得たお陰で、調査についてやっとなる程度の実感と自信が沸いてきた。24日(土)に帰名した。

3/2(金) —16(金) 宮沢千尋は南山大学の企画、総合政策学部の「南山アジア・プログラム」(NAP)の下見調査と協力の相手校との交渉のためベトナムへ出張した。その時間を使って、彼は従来

行ってきた農村調査を継続するだけではなく、念願のカオダイ教総本山の訪問も実現した。

3/12 (月) かつて人類学研究所の非常勤研究員であった Tzong-Hong Jonah Lin 氏が短期滞在中に大学を訪れて「南山大学言語学コロキウム」で研究発表した。人類文化学科の斎藤徹教授と共同研究を行っている。

今朝、朝日新聞の佐藤記者が来所して、人類学研究所主催の公開講演と、今年、創刊してから60周年目を迎えた雑誌 *Asian Folklore Studies* を中心に取材した。

3/14 (水) 今日の朝日新聞(朝刊)に佐藤記者の記事は研究所長の写真入りで載った。「世界に向けて日本発の唯一の民俗学雑誌」などと書いて下さったので、少しでも宣伝になればと思った。

3/28 (水) 被告が今月末限りで帰国しなければならないので、今日は裁判所で何かの形で今回の訴訟に解決を付けなければならなくなった。従って、そのために今日は裁判所では午前10時から午後5時までの長い時間が取られた。裁判官は最初から和解を進めたが、原告と被告が交替で弁護士と裁判官と議論を繰り返した。昼すぎになって、漸く和解の見通しが出てきた。結局、原告は告訴を全面的に取り下げること落ち着いた。「和解室」でこの結論が出た後に、皆が法廷へ移った。判事たちは法服に着替えて、着席した。先程出た結論について原告と被告、それぞれの意志を確認しただけで、和解が成立したと宣言した。5分もかからないうちにこの最後のセレモニーが修了した。午後1時だった。

3/31 (土) 小谷凱宣第二種研究所員が代表になっている国際的な長期研究プロジェクトの報告書

『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』は小谷氏によって編集され、研究所の名で発行された。小谷教授が南山大学へ来てから人類学研究所は、この研究プロジェクトの資料を預かる場所として現在小谷研究グループの活動拠点となっている。

4/8(日)来日中の Tübingen 大学教授 Klaus Antoni は名古屋で途中下車して、短時間クネヒトに会った。コーヒーを飲みながら、今回の滞在中に見学してきた出雲地方のお祭りなどについて意見を交換した。

4/12 (木) 夕方頃、小谷教授より、大林太良東京大学名誉教授が逝去された電話を受けた。大林先生からいただいた年賀状に「また入院しています」と書いてあったので、心配していたが、きょうの悲報に接してショックだった。先生からいただいた最後となった手紙に、退院してから多くの計画を次々実現したいと書かれてあったが、これらは全て計画のままになってしまった。残念だと思いつつながら、先生のご冥福を祈るばかりだ。

4/15 (日) 午後6時から始まった大林太良先生のお通夜に小谷とクネヒトは参列した。中野区の宝仏寺で行われた。祭壇上に飾ってあった写真の先生の笑顔は優しく、とても良かった。僧侶の儀礼と弔電の披露等が終わった後、弔問客が隣の部屋でご馳走になった時、先生の写真が遺された祭壇の空間が何とも言えないような淋しさに包まれていたような気がした。

この時、吉田敦彦先生から聞いた話によると、吉田氏が数日前に先生の病気見舞に行ったら、大林先生は届いたばかりの抜き刷りを嬉しそうに見せて下さったそうだ。*Asian Folklore Studies* で発表されたばかりの書評の抜き刷りだった。先生が

外国語で発表された最後の仕事かもしれない。その発表を喜んで下さったことは、編集者で、かつて先生にご指導していただいたクネヒトにとって何よりの慰めになった。故人に感謝の意を表す。

4/30 (月) 宮沢は一週間の予定で、農業合作社主任選挙等を調査すべく、ベトナムへ出張したが、合作社の都合により選挙は一年延ばされた。けれども、合作社の大会だけはひらかれて、そこで宮沢が「来賓扱い」されるハプニングがあった。かえって、これも面白いデータかも知れない。

5/4 (金) クネヒトはスイスから駆けつけた妹と共に、知多市に住む友人の娘の挙式と披露宴に招待された。妹はお嫁さんの支度立ち合うため午前7時に神社の控え室に向かった。外国人のみならず、家族の人でなければ立ち合いが許されない場を見せていただいて、大いに喜んだ彼女はパチパチとカメラのシャッターを押して、多くの写真を撮った。お嫁さんの支度、神社での挙式と料理屋の広間でひらかれた畳上の披露宴、どれを取っても、彼女にとって初体験のもので、印象的な出来事ばかりだった。クネヒトは彼女の「フィールドワーク」の結果に頼って、ちょっと珍しい資料の入手を期待して、一日も早く写真を見たいと思った。

5/12 (土) 「アジア民族文化学会」に出席する目的でクネヒトは上京した。午後1時から始まって、午後5時頃までの間に二人だけの発表があるのがこの学会の特徴だ。発表者はともかく、聴いている方にとっても重労働だと思って出席したが、あっという間に時間が飛んでしまったことに驚いた。思う存分に発表できる学会も悪くないとの感想だった。

5/13 (日) 台北の中央研究院言語学研究所(準備室)の李壬癸教授が来所して、小川尚義資料を再

調査した。李先生の念入りな仕事振りに改めて感激した。16日に帰国された。

5/26 (土) 人類学研究所主催公開講演シリーズの今年度のテーマは「イスラームの世界を知りたい」となっている。政治、経済、宗教などの様々な側面においてここ数年の間イスラームが世間の関心を集めているが、世間のイスラームに関する知識が意外に乏しいことは事実だ。この事情を踏まえて、今回のシリーズを企画してみた。本日の第一回目の講演を東京都立大学の塚和夫教授は受け持って、イスラームの教義よりもイスラームという宗教社会的現象の基礎的特徴についてわかりやすく、かつ丁寧に話して下さった。聴衆が多いとか、質問がよく出たことはこのテーマが如何に頃合のいいものかを物語った。講演後、先生がお疲れを顧みず深夜まで学生たちと付き合って下さったことも大好評だった。

6/2 (土) 3 (日) 宮沢は東京女子大学で東南アジア史学会に出席した。若きタイ研究者杉山晶子・神田外語大学専任講師(南山女子高卒)の訃報に接し愕然とする。昨年2月宮沢が世話人を勤める東南アジア史学会の中部例会で報告をお願いしたのが最後になった。ご冥福をお祈りしたい。

6/4 (月) 小谷第二種研究所員とクネヒトはリトルワールドの評議会に出席した。無駄のない会議運営の仕方に再び感激した。

6/6 (水) かつて客員研究所員だった Daniel Touro Linger 助教授 (University of California, Santa Cruz) から当時行った調査の報告書が届いた。名古屋周辺の日系人たち自身の声を通して彼らの生活の様子を描く感動的な本だ。No One Home: Brazilian Selves Remade in Japan. Stanford:

Stanford University Press, 2001.

6/10 (日) 南山大学卒ではないのに、クネヒトは南山大学同窓会懇親会に招待されて、出席した。役職上の参加だったが、会場での様々な挨拶を通して普段には余り触れない南山大学の「顔」を見ることができた。

6/13 (水) Leila Madge 客員研究所員は Victor Sogen Hori, Clark Chilson とクネヒトを手作りのご馳走に招待してくれた。「婦人の友の会」の奥さんたちとの付き合いで練られた腕前を披露してくれた。客は別れを惜しんだ。

6/16 (土) インドネシアのワヒド大統領と親しい間柄の中村光男千葉大学名誉教授は多忙の間を見て、第二回目の公開講演のために南山大学を訪れ「現代インドネシアのイスラームと国家——大統領グス・トゥルの思想と行動を中心に」と題してワヒド大統領という人間を描いたので、イスラームのもう一つの重要な側面を身近な形で説明して下さった。先生のお人柄も学生たちによくアピールした。

6/23 (土) Leila Madge と Clark Chilson は東京で開かれた Fifth Annual Asian Studies Conference Japan に参加して、Leila Madge 氏を取りまとめた Hidden Religiosity という分科会でそれぞれ発表した。Chilson 氏は、現在調査研究を進めている隠れ念仏のグループにおける encrypting と veiling という秘密性について発表した。Leila Madge 氏の方は「婦人の友の会」の隠れたキリスト教的エトスを論じた。クネヒトの方は、神奈川大学の日本常民文化研究所で「絵画資料と民具研究」というシンポジウムに出席した。農民生活を描いている絵に前から関

心を持っていたし、宮田登教授がいらした時に一度この研究所を訪ねたいと思ったこともあった。今回は、福田アジオ、佐野賢治、廣田律子などの研究者に会う機会を得てよかった。何等かの形で我々の研究所との間の関係を深めたいと思っている。

6/25 (月) 夕方に、Leila Madge の別れの会として懇談会を催して、彼女が15月間の滞在中に行ってきた調査研究について報告してもらった。去る23日の発表とほぼ同じような形で、「婦人の友の会」の宗教的(キリスト教的?)側面に話しの焦点を合わせた報告だった。

6/27 (水) 宮沢は、南山大学短期海外研究助成を受けて、約3月間のベトナム調査等に出国した。早くも病に罹って入院する難に出会ったが、退院してから、シャーマンの「降筆(機筆とも言う)」資料を蒐集したり、NAPとの関係で学生交流について打ち合わせしたりして、最後にカオダイ教に関する文献等の資料を集めたりした。また、南山大学人類学研究所第7期長期研究プロジェクト「アジアにおける市場(market)の固有論理」に関して市場調査を行ない、9月17日に帰国した。

7/7 (土) 七夕。一年に一度かつて米山記念奨学会から奨学金をいただいた方々が集まる「米山学友会(愛知)」の総会が開かれて、クネヒトは会長に再選された。

8/3 (金) 風響社から吉原和男、クネヒト・ペトロ編の『アジア移民のエスニシティと宗教』が届いた。長い時間がかかったが、市販の本が出来たいま、吉原氏と風響社の石井雅氏をはじめ、関係者の皆さんに心からお礼を申し上げる。

8/7 (火) クネヒトは渡欧し、スイスに少し立ち寄ってから、11日(土) エストニアの Viljandi に入った。International Society for Shamanistic Research の研究大会に出席し、最後の日に Fieldwork among Shamans in China と題して、現行調査活動について予備的研究発表を行った。大会後、一時スイスへ戻って、チューリヒ大学附属民族学博物館で「竹」のテーマで展示会の準備を進めている Dr. Martin Brauen に会って、展示品を見学させてもらった。23日(木)に帰名した。

8/26 (日) 9/16 (日) までの予定でクネヒトは中国へ出かけた。北京でまず、今回の調査について Sampilnorb 教授と色音教授と相談してから、29日に通訳を引き受けてくれた葉爾達氏と一緒に海拉爾へ飛んだ。今回は、昨年出会った方々と再会した他に、多くの弟子を持っているシャーマンを紹介してもらって、更にまた、トナカイ・エウエンキのキャンプを訪ねる機会があったことは、調査のハイライトだった。

9/1 (土) 予定通り、研究所の新しい短期客員研究所員、Lund 大学の Katarina Sjöberg 教授が名古屋入りした。

9/26 (水) 2日間の予定で、クネヒトは国文学科の美濃部教授、辻本助教授、そのゼミ生と伊勢神宮へ参拝し、見学した。特に、神宮司庁の吉川竜彦氏などの好意で江戸時代に「天岩戸」として巡礼の対象であった高倉山上の古墳を見学させてもらった。まむしが出るかと心配だったが、幸に無事だった。

9/28 (金) 愛知県の教育研修センターでクネヒトは昨年と同様に、スイスの異文化出身者教育について講演した。異文化出身者の多いスイスではか

れらの教育が大きな問題になっているのは当然かもしれないが、日本でこの問題が存在しないような振りをしていい時代が終ったような印象を受けた。

9/29 (土) - 30 (日) 名古屋大学で恒例の colloque international がこの週末に開かれた。「鬼」と「démon」が今回のテーマだったのでクネヒトは数人の発表を聴いた。久しぶりでフランス語の講演を聴いて楽しかったが、同じ研究会で日本の話しとヨーロッパの話しをしても、そのまま比較研究にならないことが明らかになった。

10/2 (火) 来年の秋、東京で開催予定の Inter-Congress of IUEAS 2002 の準備委員会に出席するためクネヒトは上京した。政府が援助を約束したので、開催の見通しがかなり明るくなったが、滞在費と別に参加費だけでも比較的高いので、アジアの諸国からどの位の研究者が出席できるだろうか。豊かな国々の研究者だけの集まりになるだろうか。ふっとそう思った。

10/6 (土) - 7 (日) 奈良と帝塚山大学で日本民俗学会の研究大会が行われた。昨年、入会したばかりのクネヒトが出席した。予測した通り、面識のない研究者が多かったが、昔から雑誌などの仕事を通して知っている方々も何人かいたので心強いことだった。会合が始まる前に時間があつたので、20年以上前に別な学会に出席した際泊まった旅館の界限を歩いてみた。現在は、旅館は日本料理屋になっているのでそこで昼食を取るにした。黙って入ってみたが、おかみさんが覚えてくださって、嬉しかった。

10/26 (金) Katarina Sjöberg 氏の滞在期間は後数日間で終わろうとする。彼女は毎日研究所でコンピ

ューターにかじりついたように研究と論文作成に没頭していた。今日は、その成果を懇話会で報告して下さった。社会人類学者が見た Wall Street Tribe についての彼女の報告には特別な味があった。何故なら、彼女は9月11日の多発テロ事件が起こる寸前までにあの現場の付近にいたからだ。もし万が一もう少し長くいたら....そのことを考えたくない。

11/10 (土) 「イスラームの世界を知りたい」シリーズの第3回目の講演を城西国際大学助教授の大類久恵氏がして下さい。「アメリカにおけるイスラーム市民とアメリカのイスラーム観」という彼女のテーマは、人の視線を、アフガニスタンのタリバーンを現在攻撃しているアメリカという国において生活しているムスリムの人達に向けてくれた。多くのことを新たに考えさせる示唆的な話しだった。懇親会で先生はこの話しを更に発展させ、帰りの列車の時間を忘れそうになった。

11/16 (金) ここ数年の間、ドイツの Anthropos 研究所でも改組の風が吹いていた。昨年、この研究所も包含する新たな組織、Anthropos International が設立された。この新組織の Coordinator として任命された方で、神言会の Dr. Ennio Mantovani は今日名古屋入りして、数日間をかけて、人類学研究所の研究所員と関係者と懇談した。

11/22 (木) 小川尚義が遺した資料は東京外国語大学のAA研と南山大学の人類学研究所の二カ所で保管されている。本日、台湾から来日した李と黄の両氏を初め、日本側から土田、豊島、三尾とクネヒトがAA研に集まり、資料の全面的整理と記録の電子化などについて検討した。

11/24 (土) - 25 (日) 名古屋大学大学院国際開発研究科の櫻井龍彦教授の呼び掛けに応じて、ベトナム、モンゴル、中国、台湾、韓国と日本の民俗学研究者は「国際アジア民俗学会」のために名古屋大学に集まった。二日間彼らは民俗、伝統、現代等について熱心に討論した。宮沢とクネヒトも出席したが、クネヒトは「観光開発と民俗文化」の分科会の司会を受け持った。会合の決まった共通言語はなくても、大学院に在籍している留学生たちの大いなる協力のお陰で会合が成功して、迫力のある国際会議だった。宮沢は南山大学の者だと自己紹介したところ、相手の韓国人研究者が「Asian Folklore Studies の南山大学ですか」と応えて、彼を驚かせたそうだ。旧知のベトナム民間文化研究院院長ゴー・ドゥック・ティン教授や、地方文化史の大家で、宮沢が修士論文執筆の時に、たいへんお世話になったニン・ヴィエット・ザオ先生との思いがけない再会もうれしいものであったそうだ。

12/1 (土) 宮沢が東南アジア史学会のため大分に出張した。初めての太分旅行だそうだ。

南山大学では、中央大学の片倉もとこ教授に「イスラームの世界を知りたい」のシリーズの最終講演をしていただいた。「イスラーム社会の人間観」と題して片倉教授は、自らの経験を大いに交えながらムスリムの日常生活を描いて下さった。ムスリムたちの個人的生活のイメージが出てきて、彼らに少し近づいてきたというのが聴衆の何人かの感想だった。

四回の講演を振り返ってみると、このシリーズは成功したようだ。ある人は「南山大学はイスラームに変わったか」と心配したそうだ。そういうことではないが、ムスリムと力を合わせて平和な世界を築くために少しでも貢献したと言えたら、このシリーズは成功したと思う。

12/8 (土) 千葉大学の荻原眞子教授は小谷教授の研究会で、中央アジアで現在行われている伝統的音楽の「再発見」事情についてのビデオを上映しながら興味深く報告して下さった。

12/18 (火) 午後にAA研の豊島と三尾両氏が研究所にみえて、記録用の写真を撮るために小川尚義資料から適切な物を選出する作業に当たった。

12/22 (土) 大学院の文化人類学研究科では「論博」の第一号が出る運びとなった。その関係で、駒沢大学の佐々木宏幹名誉教授が大学にみえた。審査の労が終って、夕食の時、クネヒトも招かれ、先生が中国で実施したシャーマンの調査について興味深い話を聴かせていただいた。

◆研究所の活動◆

◆研究会

第7期研究計画(特定研究)「アジアにおける『市場(market)』をめぐる固有論理に関する学際的研究」

◇構成メンバー(所属・担当テーマ)

クネヒト・ペトロ(南山大学人類学研究所所長・中国内モンゴルにおける物々交換)

原不二夫(南山大学外国学部アジア学科長・アジア経済危機におけるマレーシアのマレー人企業と華人企業の対応)

森部一(南山大学人文学部人類文化学科教授・人類学研究所第2種研究員・タイの開発僧)

坂井信三(南山大学人類文化学科長・人類学研究所第2種研究員・アフリカ、マリにおける在地綿生産と植民地主義)

中裕史(南山大学外国語学部アジア学科助教授・人類学研究所第2種研究員・社会主義市場体制下の中国文学)

中西久枝(名古屋大学大学院国際開発研究科教授・イランのバザールと宗教指導者の関係、イスラム銀行のありかた)

吉田竹也(南山大学人文学部助教授・バリ島の観光人類学)

野田真里(名古屋大学大学院国際開発研究科助手・内発的発展と仏教)

宮沢千尋(南山大学人類学研究所講師・第1種研究員・社会主義「市場」体制下における、「経済計算制」と農業合作社によるバオカップ(包給)制度維持への努力)

◇研究実績

宮沢・森部・中で共同執筆の研究ノートを『アカデミア』に発表(2002年1月発行、詳細は次号掲載)

◇受けた研究助成

東海学術奨励会、平成13年度研究助成・優秀研究「アジアにおける『市場(market)』の固有原理に関する学際的研究」(研究代表者・宮沢千尋)
(平成14年1月19日、中日新聞にて発表)

◆懇談会

第一回

日時:2001年1月26日(金)16:30-18:30

場所:研究所2階談話室

講師:Dr. Leila Madge(人類学研究所客員研究所員、日本学術振興会外国人特別研究員)

演題:“Cuteness and Beyond: Consumer Aesthetics in a Post Postwar Japanese Order”

第二回

日時:2001年6月25日(月)16:30-18:30

場所:研究所2階談話室

講師:Dr. Leila Madge(人類学研究所客員研究所員、日本学術振興会外国人特別研究員)

演題:“Christian Ethics and the Modern Domestic Sphere”

第三回

日時:2001年10月26日(金)16:30-19:00

場所:研究所2階談話室

講師:Katarina Sjöberg, (Associate Professor, Lund University;人類学研究所短期客員研究所員)

演題:“The Wall Street Tribe: A Social Anthropologist Looks at the People on the Stock Exchange”

◆公開講演

シリーズ「イスラームの世界を知りたい」

第一回

日時：2001年5月26日（土）14:00-17:00

場所：南山大学E棟E11教室

講師：大塚和夫氏

（東京都立大学教授）

演題：「現代イスラームの諸問題とその歴史的
背景」

第二回

日時：2001年6月16日（土）14:00-17:00

場所：南山大学E棟E11教室

講師：中村光男氏

（千葉大学名誉教授）

演題：「現代インドネシアのイスラームと国家
——“グス・トゥル”大統領の思想と行動を中心
に」

第三回

日時：2001年11月10日（土）14:00-17:00

場所：南山大学E棟E11教室

講師：大類久恵氏

（城西国際大学助教授）

演題：「アメリカにおけるムスリム市民とアメ
リカ人のイスラーム観」

第四回

日時：2001年12月11日（土）14:00-17:00

場所：南山大学E棟E11教室

講師：片倉もとこ氏

（中央大学教授）

演題：「イスラーム社会における人間観」

◆出版活動

宮沢千尋

- * 論文 「ベトナム北部における社会主義市場体制と「宗教」「民間信仰」「迷信異端」 森部一編著『文化人類学を再考する』173-215. 青弓社
- * 書評 松尾信之著「一九世紀末ベトナム北部の訴訟文書から見た「国家」、村落、村落内有力者」『法制史研究』50号、2000年4月、344-347

クネヒト・ペトロ

- * 「「もう一つの声」を発するもの——「応声虫」をめぐって——」『アカデミア』人文・社会科学編第73号、2001年6月、143-256（美濃部重克、長谷川雅雄、辻本裕成共著）
- * 「あとがき」吉原和男、クネヒト・ペトロ編『アジア移民のエスニシティと宗教』375-79. 風響社

小谷凱宣編

- * 『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』南山大学人類学研究所
- * 南山大学人類学叢書
吉原和男、クネヒト・ペトロ編『アジア移民のエスニシティと宗教』東京：風響社

◆ASIAN FOLKLORE STUDIES: VOLUME LX-1 (2001)

ARTICLES

Editorial (Peter Knecht)

A Proverb Poem by Refiki (A. L. Macfie and F. Macfie)

Myths of the Czech Gypsies (Nina Pavelčík and Jiri Pavelčík)

The Names and Identities of the Boramey Spirits Possessing Cambodian Mediums (Didier Bertrand)

Chindonya Today: Japanese Street Performers in Commercial Advertising (Ingrid Fritsch)

The Emergence of *Kaidan-shū*: The Collection of Tales of the Strange and Mysterious in the Edo Period (Noriko T. Reider)

A Description of *Jiangjing* (Telling Scriptures) Services in Jingjiang, China (Mark Bender)

OBITARY

In Memoriam: Nelly Naumann (Maria-Verena Blümmel and Klaus Antoni)

VOLUME LX-2 (2001)

FOLKLORE OF THE IRANIAN REGION

Introduction (John R. Perry)

From Iranian Myth to Folk Narrative: The Legend of the Dragon-Slayer and the Spinning Maiden in the Persian Book of the Kings (Kinga Ilona Márkus-Takeshita)

Persian Popular Literature in the Qajar Period (Ulrich Marzolph)

The Gender of the Trick: Female Tricksters and Male Narrators (Margaret A. Mills)

Rostam's Seven Trials and the Logic of Epic Narrative in the Shahnama (Mahmoud Omidshafar)

Traces of Ancient Iranian Culture in Boysun District, Uzbekistan (Ravshan Rahmoni)

The Persianization of Köroglu: Banditry and Royalty in Three Versions of the Köroglu Destan (Judith M. Wilks)

Healing Practices among the Yezidi Sheikhs of Armenia (Victoria Arakelova)

Hunters' Lore in Nuristan (Almuth Degener)

INDEX

Cumulative Index : Volumes 51-60 (1992-2001)

雑誌 Asian Folklore Studies の購入等に関するご連絡は下記までお願いします。なお、年間の購読料は6,000円(団体)と3,000円(個人)となっています。

連絡先

466-8673 名古屋市昭和区山里町1-8

Asian Folklore Studies 編集室

TEL: (052) 832-3111 (南山大学代表) FAX: (052) 833-6157